



1996 年(平成 8 年)
2 月号 (No. 609)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目 次

シンポジウム・最近の山岳通信の進歩	1
今西壽雄元会長のお別れ会	4
追悼・今西壽雄さん	4
入澤郁夫さんを偲んで	5
石井恵美子さん	6
田邊史さんを偲ぶ	7
東西南北	
名誉会員章をつけたサムエル・ブラヴァント氏	8
南会津下郷のオオカミの剥製	8
海外の山	9
白山の黒百合に埋もれて	10
ウエストンとアルプスの冒険談	11
山の切手・5	11
支部だより	12
北海道 岐阜 青森支部	
山と医療	13
図書紹介	14
『グリンデルワルト便り』『北朝鮮の山』『村の記憶』『グリーンランドは旅人を離さない』『母なる大空』『関大山岳部の 70 年』	
書籍受入報告・新入会員	15
山研だより	16
会務報告	17
会員異動	18
創立 90 周年記念事業募金応募状況	18
INFORMATION	19
ルーム日誌	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13～20時

シンポジウム 最近の山岳通信の進歩

科学研究委員会

今日、日常の電話システムに携帯電話が導入され、人工衛星利用も可能となり、GPS 衛星で自己の位置が容易に検出できたり、気象ファクシミリによる雲の写真がリアルタイムで受信できる時代になった。四人の講師をお招きし、昨年の十二月二

日十三時三十分から十七時三十分、青山学院大学総合研究所ビル十一階会議室にて、新しいシステムの山岳地での有効利用について、平易に解説を行うとともに、将来、より安全便利な山岳通信へ応用する可能性を、広い視点から探るためのシンポジウムを開催した。

最初は芳野超夫会員が過去の山岳通信のたどった道を、続いて最新の三つの分野について、酒匂一成、北条晴正、根岸秀忠の三講師が講演し、最後にパネル討論で締めくくった。

■従来の山岳通信網について

戦後初めてこの問題に取り組み、長年この道に努力してきた芳野会員から、昭和二十五年以降現在までを第一〜第五期に分類し、各期における山岳通信発展の経緯と問題点を振り返り上げ、山岳通信の発展過程を振り返った。

第一期は、第二次世界大戦中に発達した移动通信技術を、戦後の大規

模な登山隊の隊内連絡に応用することから始まった。芳野会員は昭和三十一年の第三次マナスル登山隊用に、初めてヒマラヤ用通信回線システムを設計し、サブミニチュア真空管を用いた当時としては超小型の移動用トランシーバを製作し、また登頂成功を知らせる超小型自動信号送信機を試作した。これはあらかじめ登山用通信回線を設計し、機器を開発して実行した世界最初の試みで、その後日本山岳会方式として各国の登山隊が追随した。

第二期は、半導体技術が急速に発展し、無線従事者資格が不要な 27MHz 市民バンドが開放され、これを携帯した登山者が、無線通信が遭難対策上非常に有効なことを認知した。昭和四十年、日本山岳協会は市民バンドに沈黙時間などを制定し、遭難早期発見と迅速な救助活動の推進を

開始した。

第三期では、当初は非常に有効と

みられていた沈黙時間が、やがて山以外の使用者の電波が強力に混信し、十分に機能を発揮できなくなった。しかし、一般登山者が免許なしに使用できる無線機は市民バンドしかないので、やむをえず大変な不便を感じつつも現在に至っている。そこで登山者が誰でも使える通信網の新設を電波管理局に長期にわたり申請し続けた結果、昭和四十七年に使用目的を遭難対策に限って、26・708MHz が長野、岐阜、富山、山梨県の遭難協に山岳専用周波数として割りあてられた。しかし長年の夢であった一般登山者に対する無線機使用は認められないまま今日に至っている。

第四期は、通信の高周波移行と同時に、山岳遭難の未然防止と救助活

動に電波利用を考え、昭和六十一年九月、郵政省内に芳野会員を主査とする「山岳無線利用調査研究会」が設置され、将来の山岳通信について研究を行った。郵政省は新しく移動携帯電話を新設する可能性を示唆し、第五期の到来を告げていた。

■移動通信の活用と通話区域の検索
および人工衛星を利用した近い将来の移動通信

NTT移動通信網(株)日比谷支店長の酒匂一成氏が、とくに山岳通信の観点から講演した。酒匂氏ははじめ

に、通信の定義を述べ、究極の通信は「何時でも」「どこでも」「誰でも」「誰とでも」「どんな情報でも」送受できるものと定義し、現在携帯電話サービスは爆発的に使用者が増加しつつあり、すでに七百万契約を超え、今年度末には一千万契約に達すると予想した。

NTTドコモでは、携帯電話・自動車電話サービス、船舶電話サービス、航空機電話サービスを提供、陸上は市町村の人口の多いエリア、高速道路や国道などの主要な生活圏を

サービスエリアとしており、すでに全国の人口カバー率が九七パーセントを越え、通常の生活圏での利用は不自由なくなった。しかし、サービスエリアの全国の面積率は三〇・三五パーセントで、山岳地帯はほとんどサービスエリア外になり、山岳地帯までサービスエリアを拡張する要求をしても、設備コストに比較して通信量(通信料)が少ないことから、面積あたりの収入率が悪化し、結局山岳のために利用者全体の負担が増すこととなり、実現は難しい。

携帯電話のサービスエリアは、基地局から見通しのある場合には、平地では通常四〇

キロメートルが限度であるが、谷や沢などで基地局との見通しがいい場所では、電波伝播の特性から通信できなくなる場合が多い。山岳地帯での携帯電話は「通信できたらもうけもの」であり、通信ができないからといってドコモに文句を言われても責任は負いかねる。しかし実際の山岳地帯では、稜線上、山頂などからは思いもかけぬ距離と交信が可能で、実際には送信してみないとわからない。

携帯電話の利点は、市民バンドなどとは異なり、公共通信網に直接リンクできるため、遭難、緊急時には直接自宅、または一一〇番、一一九番に通話して救助依頼ができることである。さらに、医師に電話して治療の指示を得ることもできる。また、携帯電話はISDN回線を通していろいろな情報を送ることができ、従来考えられなかったような新しい用途が開けている。

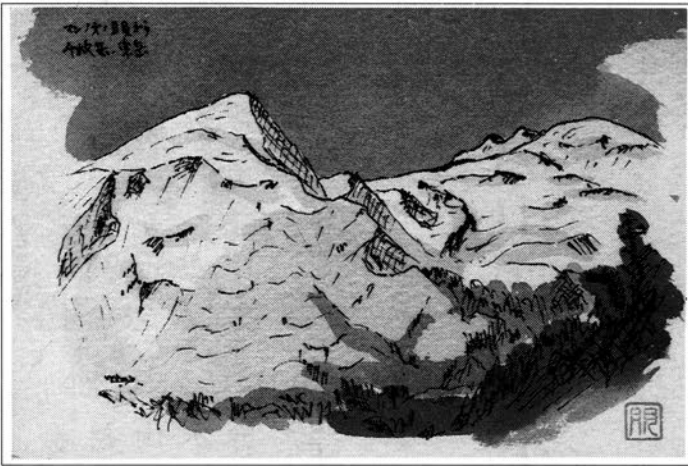
衛星移動通信サービスは移動通信エリアを日本全国に広げることができるので、山間部の九九・九パーセントが高感度で通信可能なサービスエリアとなる。現在衛星移動サービスには二つの流れがあり、NTTドコモの静止衛星方式と、米国モトローラ社の移動衛星方式によるイリジウム計画が進行している。すでにN

TTドコモは、赤道上空三六〇〇〇キロメートルの静止衛星軌道にNISTAR衛星を打ち上げており、今春衛星移動通信サービスを開始するが、衛星は南方の仰角四五度に位置するので、ビル陰が多い都市部では効率が悪く山岳部のほうが遥かに利用しやすい。山岳用としての欠点は、距離が遠いため現在の静止衛星用電話機の大きさがノートブック型パソコン程度となることである。

イリジウム計画では、地上機器の大型化を避けるため、一九九八年までに高度七八〇キロメートルに六六基の軌道衛星を打ち上げ、移動電話の世界的サービスを行う予定で、複数の衛星が絶えず上空を通過し、二四時間地形にかかわらず通話が可能、機器の大きさは高度が低いいため現在の携帯電話機程度となり、この計画が完成すれば山岳通信には究極的なシステムとなる。日本国内は第二電電(DDI)が提携サービスを担当する。

■GPS衛星位置の決定および今後の新技術の山岳通信への応用

日本無線(株)研究所部長の北条晴正氏が、最近カーナビゲーションで有名になった衛星測位システムGPSについて、その位置決定の原理、管理と運用システム、サービス内容、測位誤差などについて、参加者に丁



イラスト・山本明三郎「南アルプス50景」より

寧に、わかりやすく解説をされた。

GPS衛星はアメリカ海軍が打ち上げた電波航法システムで、従来のシステムに比較して非常に信頼性に優れており、海、空、陸上の広範な分野での利用が始まっている。GPS衛星は一軌道に四個ずつ六軌道、計二四個の衛星が高度二〇〇〇キロメートル、傾斜角五五度で地球の回りを周回している。この衛星は一般民間用にSPSモードと、軍用にPPSモードの二種類の測地信号を送ってきており、SPSはわざと測位精度を落としているが、SPSで水平一〇メートル以下、高さ一五六メートル以下、時刻三四〇ns以下に保たれ、PPSでは水平二メートル以下、高さ二七・七メートル以下、時刻二〇nsに保たれている。さらに民間用SPSについて精度向上の研究の結果、DGPS法を用いると相対測位誤差が一メートルまで改善できる。

この民生用GPS受信機は、高精度化とともに小型化、低消費電力化、低価格化が図られ、携帯用では単三電池四本で二〇時間も持つものが販売されている。GPSの登山における利用価値ははなだ大きく、未知の土地における位置決定に大きな威力を発揮するとともに、地殻変動、水河の移動、地形図の作成、霧など

の中で山スキーの際の自己の位置決定などに有効に応用できる。

■気象衛星画像を直接受信するシステム

(株)エーオーアル取締役の根岸秀忠氏により行われた。(株)エーオーアルは、山岳地などで気象衛星ひまわりの画像や短波を使って気象図を受信したり、小型の気象観測装置、超小型で長波から人工衛星まで受信範囲の極めて広い、高性能機器を生産している会社である。ひまわりは赤道上の東経一四〇度、距離三五八〇キロメートルに静止しており、周波数一六九・一MHzで、指向性の鋭いパラボラアンテナを衛星の方向に固定して受信する。エーオーアルの機器を使用する場合、直径九〇センチメートルのパラボラアンテナ・低雑音増幅機・同社製のAR3000型受信機、WX2000型FAXプリンターを接続し、極めて小型で簡単に受信が可能である。

ひまわりの雲画像のうち主なものは可視画像と赤外画像で毎時〇分より送られ、前者は太陽光の反射の度合いを図り、雲、雪、氷がより白く見えるが昼間しか観測できない。後者は物質の温度に応じて出される赤外線放射の強弱を測ったもので、温度の低い高層雲は白く、中層雲は灰色に、陸や海は黒く見え、昼夜間観

測できる。その他同社製の簡易気象観測システム「ウェザーモニターI」について説明があり、いずれも実物を提示しての講演で、大きな機能の割に超小型で消費電力も極めて少なく、山岳などでの野外の使用もよく考慮されており、参加者は最新の技術の進歩に目を見張っていた。

最後に芳野会員の司会で酒匂、北条、根岸の各講師と、登山者を代表して科学委員会から中川、大蔵の両委員が参加し、パネル討論が行われた。中川、大蔵の両氏からは、登山者の意見として、自然を求めて山に入ってきたで、下界から電話が追いかけてくることは我慢がならない、と至極当然な発言があった。このシステムの導入は長電話を目的としているのではなく、緊急時に確実な連絡ができることを目的としているので、バッテリーの消耗を防ぐためにも普段は電源スイッチを切っておく。また電話番号をやたらに他人には教えないで、山からはもっぱら送信用とすること、この問題は解決できる。山岳会としては、携帯電話は普段の生活にも有効に使えることを考え、登山者が携帯電話を携行することを強く推進していきたい。その場合は、人工衛星通信が実用化されるまで、携帯電話会社にシーズン中の山中臨時基地局の設置を要求したり、緊急

時に一一〇番、一一九番を直接呼び出した時、管轄区域外の所轄署に電話が接続される場合があるので、スムーズに最寄りの所轄に電話の接続を依頼するなどの要求が出され、参加者を交えて活発な討論が繰り広げられた。

＊

参加者数約六十名。なお、当日の予稿集があります。ご希望の方は千二〇一狛江市岩戸南三一三六森武昭(Tel・Fax〇三三三四八八四六七)宛、七百七十円(送料込み)を同封してお申し込みください。

(芳野勉夫)

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

 前田製管株式会社

本社／酒田市上本町6-7

☎ (0234) 23-5111

今西壽雄元会長のお別れ会

阿部和行

今西さんが亡くなってひと月近く経った十二月十二日、大阪のロイヤルホテル光琳の間で、一時から「今西壽雄とお別れ会」が開催された。

当日は山岳関係をはじめ、日本ネパール協会、京都大学、浪速高等学校、ロータリークラブ、ライオンズクラブ、その他地元、学校、団体、プレスなど、関係先別に受付が作られ、今西さんの幅広いご交際の様子がうかがわれた。

式場に入る手前に広い懇談会場が



用意されて、その壁面には今西さんの子供時代から、三国合同エベレスト登山に至る一連の写真が飾られていた。そして、写真の前の白布掛けのテーブルには、日本で最初の八千メートル峰マナスル登頂に使用された今西さんの装備が展示され、定刻より早くから来場した参会者が、列をなして写真や装備に見入っていたのが印象に残る。

日本山岳会からは村木会長をはじめ、山田元会長、藤平前会長、斎藤宮下副会長ほか多くの会員が、また日本ネパール協会の川喜多前会長や京大AACKの人たちなど、実に多方面の方々の顔が見えた。

式場には祭壇の正面にマナスルの大きなカラー写真を背に、今西さんのお元気な顔写真が飾られ、左右にマナスルを囲むようにマーガレットの花の山が長く裾をひき、その左右と段上には白い蘭の花が一面に飾られた非常に清潔な感じの祭壇が設けられていた。

式は弦楽合奏の序曲にはじまり、まずご交際の深かった裏千家・家元による献茶が行われてから開会の言葉に入り、皆いっせいに今西さんを

偲んで黙禱を捧げた。

お別れの言葉には、最初に日本山岳会村木会長が立たれ、ついで藤平前会長と、今西さんとともにマナスル、アンナプルナで、それぞれ苦難な行動をとともにされた方々の、当時を振り返った深い絆ともいえる思い出など、感動に満ちた言葉が続いて、山に対する今西さんの姿勢を改めて感じたのだった。

ときには弦楽合奏の献奏曲が入り、斎藤副会長から病状の経過が話され、駐日ネパール大使は、今西さんのネパールに対して尽くされた数々の功績を紹介された。ひと区切りのあと、今西さんの足跡としてのVTR「頂上へ」で、マナスル登頂の感激を再び新たにした。

三年の抑留生活を送ったシベリアは、今西さんにとって消し去ることのできない思い出だったに違いない。献奏曲は今西さんがさまざまな思いを込めてよく歌っていた「戦友」の男声合唱に変わり、静かに終わった。やがて今西組社長であるご長男のご挨拶があり、各界の代表者による献花、今西さんへの思いを託した参会者の献花が長く続いた。係の人のお盆から一本ずつ取り上げて祭壇に捧げたのは白いスイートピーの花。あくまで清澄な式典は終わった。

二時間にわたるお別れ会であった

が、想い出や新たな感動に、全く時間を感じさせない荘重な式典であった。そして最後に、とくにご願いして山岳関係者の一堂に会した写真を撮って、今西さんとお別れしたのでった。

追悼

今西壽雄さん

日本登山界の巨星

消える

大塚博美

日本登山界の巨星の一つが、またもや消えた。頑健、細心にして大胆な行動、寡黙、穩健、酒豪。厚い信頼と畏敬を一身に受けられていた。一九九五年十一月十五日、膀胱癌で死去。あの強健な身体のことを思うと、登山界ばかりでなく、各界にとってショックな出来事であった。氏は一九一四年九月九日、奈良県高田市に生まれ、四一年京都大学農学部卒業。旧制浪速高校時代から登山を愛好し、京大に進んでからは、足跡を国外にまで広げ、ますます激しさを増した。戦前、日本登山界の中核は学生であり、その学生登山黄

金時代の一翼を担ったAACKの中心のメンバーであった。

山歴の主なもの、国内では鹿島槍北壁積雪期初登頂(一九三五年)、厳冬の樺太犬橇走行(一九四〇年)。国外では韓国済島漢拏山積雪期初登頂(一九三五年)、内モンゴリア調査隊(一九三八年)参加がある。ヒマラヤへの夢は時代背景(日支事変)によって遠のいていた。

第二次大戦終了後の一九五三年、AACKは単一大学では戦後初のヒマラヤ登山隊をアンナプルナII峰に派遣。隊長となり、猛烈果敢な登攀は、登山史の語り草となっている。

一九五六年日本山岳会第三次マナスル登山隊(L・榎有恒、毎日新聞社後援)に参加し、五月九日、ギャルツェン・ノルブとともに初登頂に成功、続く第二次隊の日本人二名も十一日登頂し、足かけ五年にわたるマナスル登山計画は無事終了した。

この登山の成功は、戦後日本の復興と軌を一にし、国民の大きな関心を呼び、暗い世相の中で勇氣と明るい希望を与えた。これにより登山隊は、天皇陛下の拝謁を賜り、文部大臣よりスポーツならびに学術界貢献による感謝状を授与された。

また、(株)日本山岳会会長時代(一九八五―一九八九年)日・中・ネ三國友好チヨモランマ・サガルマタ合

同登山隊の日本側総隊長を務め、南と北からの交差縦走を成功させた。

併せて山頂からのTV衛星生中継も成功、世界最高峰からの素晴らしい大景観を臨場感いっぱい、感動のヒューマンドキュメントを放送。中国、ネパールの人々にも大きな話題を提供して、友好とヒマラヤ登山の実際の理解に役立てた。この功労によりネパール王国のゴルカ・ダクシン・バフ勲章(勲二等)、中華人民共和国国体育運動榮譽獎章(二等獎章)を受賞した。

氏は、日本がヒマラヤ登山史上に初登頂の記録を残した榮譽を担った一人としての感謝を終生忘れることなく、とくにネパールに対しては枚挙にいとまがないほど公私にわたる援助活動を行ってきた。その代表的なものの一つとして、一九七〇年大阪万博におけるネパールパビリオン建設の今西組支援がある。またネパール王国大阪名誉総領事(一九九三年四月―一九九五年十一月)を拝任し、社内に事務局を設け、役務を支援した。

日本山岳会会長時に果たした創立八十周年記念事業としては、三國合同登山の成功、ならびに若手登山家に対する登山奨励のための登山基金の設定などがある。多忙な社長業の傍ら、寧日のように大阪・東京間を新幹線で往復し、一回として会合に

欠席したことはなかった。当時七十一〜七十五歳であったことを考えると、驚くべきバイタリティーであり、壮者をも凌ぐ壮健さであった。これは日本山岳会に対する深い愛情の証である。一九八八年、日本山岳会の名譽会員となる。

氏は、大学卒業後内務省に勤務、兵役、敗戦、シベリア抑留を経て一九四八年復員。父の経営する今西組に入社、一九六三年取締役社長となる。三十余年にわたり社長として社業の隆盛を支え、建設業界においてもその堅実な業績と人望により、多くの公職を歴任した。(株)全国建設業協会会長、地元(株)大阪建設業協会副会長など、十数指にわたっている。戦前からの日本登山界の猛者が、これでまた一人他界した。一つの大幕が閉じられた。(合掌)



追悼
入澤郁夫さんを偲んで

豊田 泰

十一月十二日の朝刊を見て、家族が叫んだ。「あつ、これお父さんの知ってる人じゃないの」。そこには、「雪崩で十三邦人ら二十六人遭難」という大見出しで、エベレスト山群ツアー中の山小屋を直撃とあり、遭難した方々の中に入澤郁夫(六十七)の名があった。私は、氏の小柄ながら頑強な体軀を思い浮かべて、最後の一人になっても生きていられるのではないかと願った。しかし、翌十三日の夕刊では、遺体が発見され写真まで掲載されて希望は碎け散った。

入澤さんに初めて接したのは、一九七八年八月の養清堂画廊での第二回木版画個展の時であった。私は知らなかったのだが、産経新聞に日野耕之佑という画家が、写真入りで論評してくれたのを見られたらしい。その時の作品はほとんどが剣岳で、若い頃岩登りに夢中であった氏には懐かしいものであったらしく、「ハッ峰C、Dフェース」を所望された。その後、山行に何度か誘われたが、私が腰を痛めたり、家庭の事情やらで行けなかったのが悔やまれる。

唯一、ご一緒したのが、一九八五年二月のハッ峰であった。これは冬山はやらないと決めていた私に冬山を見せたくて、私のために計画されたものであった。佐藤征郎さんと佐藤知恵子さんなどというベテランを

屈強のポーターとして、美濃戸口から行者小屋へ向かった。素晴らしい天気で、その日入澤さんは私を中山乗越に同道して、圧倒的な景観のただ中に置いてくれた。それは私にとって生涯忘れることのできない感激であったし、モチーフとして貴重な財産となっている。その晩は小屋に泊まったが、近くの山岳会のテントに案内されてウイスキーなどご馳走になり、楽しい雰囲気も味わわせてもらった。

翌日は打って変わった小雪混じりの烈風で、文三郎道を登ったが、軽量の私が風に飛ばされることを恐れて引き返した。入澤さんはそうした非常に慎重な方であった。恐らく今回のヒマラヤも入念な計画であったろうが、シェルパも経験したことのない異常気象には勝てなかったのであらう。

この得難い冬山の印象の一部は、九〇年と九二年の個展作品になった。入澤さんは毎回来てくださって、私は山のお礼に「大同心、小同心・冬」を差し上げた。個展が終わってから日本橋の会社で連れられて行き、柳橋の料理店で馳走になったこともある。真っ暗な柳橋を、もう今はこんなになってしまって、と言われていた。

一九九〇年九月入澤さんから、上

高地でスケッチをするのでは是非参加しないか、と声がかかった。それがスケッチ山行の第一回であった。今から考えて見ると、当時理事であった入澤さんは、スケッチクラブを作る目論見で、個展の経験のある私を誘ったのかもしれない。それからアルパイン・スケッチクラブが発足し、私は入澤さんの紹介で山岳会に入会した。第三回のスケッチクラブの展覧会が有楽町の交通会館で開かれた時、渋谷の片隅から銀座の大通りへ店を出したようなものです、と言ったら、嬉しそうに笑っておられた。入澤さんに最後にお目にかかったのは、今年のガラス絵個展の時である。このところ本を二冊ほど贈呈していたからであらうか、「瀟洒な体でよくもまあエネルギーがありますね」と言われた。瀟洒などと言われたのは生まれて初めてのことで仰天したが、これが耳に残る別れの言葉となってしまった。

入澤さんからは、西暦で生まれ年のついた赤いセーターと、やはり赤い毛糸のベストをいただいており、これが形見となった。あなたももう赤いものが似合うのではないかと、というご意見であったが、私は気恥ずかしく、これまで身に着けたことはない。しかし明日の葬儀には、思いついてこのベストを着て行こうと思

う。場違いな感じではあるが、入澤さんはあのニコニコした丸い顔で喜んでくださるだろう。

(一九九五年十一月二十四日)

追悼 石井恵美子さん



中村純二

十一月十日、ネパールの季節外れの雪崩で、石井恵美子さんが亡くなられた。

石井さんは、一九六二年中央大学独逸文学科を卒業、運輸省を経て、気象庁総務部に勤務されていた。夏期には北尾根、北鎌尾根、谷川一ノ倉谷など、冬期には摩利支天、立場川本谷などに入る山のベテランで、一九八五年、大井正一氏と私の紹介で本会に入会された。

会では科学研究委員会委員として大変活躍された。探索山行の際、天気予報の情報を一手に集めたり、気

象、火山、地震などに関するシンポジウムでは講師の推薦、会計や予稿集の編集・印刷を引き受けるなど、委員会の重要なメンバーの一人であった。

一方、石井さんの登山・スキー熱はますます盛んで、物静かだがいつも笑顔を絶やさない明るい性格は、知人の輪を支部会員にまで次々に広げていった。私どもがあるとき「静かな奥美濃の山に出かけたいと思っている」と話したところ、早速岐阜の支部会員に連絡してくださり、お陰で能郷白山や冠山登山が実現した。一昨年四月、石井さんは突然岐阜地方気象台に転勤になった。翌五月、岐阜支部の平家岳・大日岳山行には私どもも誘ってくださった。あいにく強風雨だったが、再び美濃の山に登ることができた。帰途、私ども夫婦は長良にある石井さんのマンションに泊めていただき、夜は近くの川辺で鵜飼いをともに見物したりした。その秋の玉山山行も石井さんと一緒にだった(会報五九七号)。紅葉見物に石井さんと三人で岩菅山に登り、夜中予期しないドカ雪に見舞われ、翌日予備の靴下を手袋替わりにはめ、下山してきたこともあった。

作年の四月、石井さんから「私は定年まで、後まだ三年あるが、いまのうちに海外の山にも出かけたいの

で、この際気象庁を退職しようと思う。しかし美濃にはいい山が多いので、引き続き長良に住むつもり」との手紙が届いた。九月末、科学委員会は「奥美濃の植物」をテーマに大日岳探索山行を実施したが、この時も石井さんは進んで岐阜支部側の担当者となり、行き届いた協力をしてくださった。

十一月になってヒマラヤトレッキングに参加の石井さんたち十三名の一行は、目的のゴキョピーク（五四八メートル）登頂を果たし、氷河まで下りてきて宿泊した山小屋で雪崩に襲われた。全員遭難死という悲しい結果に見舞われた。そこは比較的開けた沢で、数軒のロッジも立ち並び、このような事故が起こればだれも考えないところであった。一昨年のちょうど同じ時期に、私どもは標高四〇〇メートルのムスタンに出かけたが、せいぜい小雪が舞う程度の乾季に当たり、ドカ雪が積もるなどとても考えられなかった。今回の事故はまさに不可抗力的な異常気象によるものであったと考えざるを得ない。

山をこよなく愛し、しかもようやく勤めから解放され、これから存分に、自身の登山やスキーを楽しみたいと考えておられた矢先の出来事であって、誠に残念でならない。石井

さんは私どもの心の中にいつまでも暖かい思い出を残し、励ましを与えてくださるであろう。いまはただ、石井さんの霊が永遠に安らかに眠りたまわんことを祈るばかりである。

追悼 田邊史さんを偲ぶ



石田要久

先のネパールクレーン地方で二十五年の命を呑みこんだ大きな雪崩で、会員三名を同時に失う事故が発生し、その中に田邊史さんがおりました。「ヨールレイティ」山並みにこだまする深く澄み透る声が、もう聞けなくなっていました。彼はヨールデルが好きで、たくさんのレコードを収集していましたが、歌唱力もプロはだでした。いつ練習したのか、家庭で練習すると三姉妹のお嬢さん方から蟬聲をかうとかで、山旅のときに練習したのでしょうか。アルパインスキークラブの山行のときに、

興がのればよく聞かせてくれました。田邊史さんは一九三〇年（昭和五年）九月二十五日生れ、東京の浅草で産湯につかり、神田で育った江戸っ子です。学校もすべて神田でした。暁星高校在学中から山岳部で山登りを始め、明治大学では体育会山岳部に所属して、厳冬の剣岳や槍ヶ岳北鎌尾根などで活躍しました。

昨年九月に会社を定年退職し、やっと今まであたためていた種々の計画が実行できると喜んでいました。その計画の第一歩が今回のトレッキングだったのです。同行の石井恵美子さんも九五年三月に退官、入澤郁夫さんも同六月に後進に道を譲ったばかりで、これも何かの因縁だったのでしょうか。さぞ心残りのことでしょう。

当会に入会するとき、会員番号にエベレストの標高と同番号を狙っていたのですが、残念ながら八八五〇番と二番ずれてしまいました。フォトリデオクラブとアルパインスキークラブの発足時からメンバーで、フォトリデオクラブでは事務局を担当していました。アルパインスキークラブでは山スキーもさることながら、研究熱心で例会には休まず出席して多くの知識を披露しました。また几帳面な性格で、いずれのクラブでも重鎮でした。

田邊さんは六十五歳を迎えても若さにあふれ、元気に登山を続けていました。数年前の夏に後立山を縦走したときは、天狗平から白馬岳を越えて朝日岳まで重い荷を背負って一日で歩いたし、その翌年立山から槍ヶ岳縦走のときは、三俣蓮華から槍の肩まで台風の中を歩きました。同行の浜口ドクターが、どうしてもその日の内に槍ヶ岳の診療所に入らなければならなかったこともありすが、双六池キャンプ場のテントが幾張りも強風に飛ばされるのを見ながら、縦沢岳の登りです。小柄な彼も飛ばされて、いったん双六小屋へ引き返し、態勢を整えて再度強風の中を西鎌尾根へ挑戦しました。その日は盆休みにもかかわらず、途中一人の登山者にも会わず、稜線で行動しているのは我々のみで「無謀な中年だね」と笑ったものです。彼は基礎体力もあり、慎重な中にも大胆さを持ち合わせた貴重な存在でした。

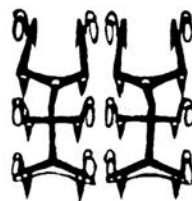
最近では盛んになる中高年登山と、それに伴う遭難事故の増加にも関心をもち、VISAカードのカルチャースクールで中高年グループの指導も手がけていました。

今年度からは評議員に選出され、会発展のため活躍してもらおう矢先の事故で、誠に残念でなりません。

謹んでご冥福をお祈りします。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚をお願いします）

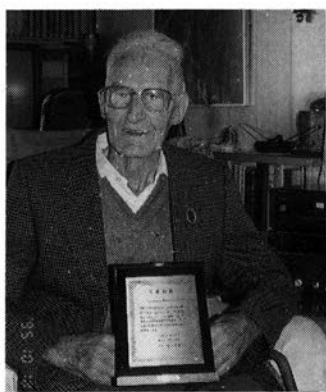


カット 中村あや

名誉会員章をつけた サムエル・ブラヴァント氏

岡澤祐吉

昨年の十月初め、スイス・アルプスのメンヒに登った帰りに、グリーンデルワルトに寄り、サムエル・ブラヴァント氏を訪ねることにしていたが、ルートに選んだ東南稜が九月の積雪で状態が悪く、思いもかけず時間を取ってしまい、寄れなかった。



このため、日を改めて十月十八日、

シャレー・アーホルンにブラヴァント氏を訪ねた。九月に横恒治氏が訪ねたことを同氏の電話で知っていたので、ブラヴァント氏がまだ人に会える状態であることは分かっていた。会ってみると、数年前に比べ顔の艶はすっかりなくなり、毎日近くを散歩するというものではあったが、当時の気力は感じられなかった。長く話をすると疲れるとのこと、孫娘のマルグリットと打ち合わせ、十五分くらいで話を切り上げることにした。同氏の身辺の世話をしているボス夫人の様子からも、老ブラヴァントの弱った様子は伝わってきた。

九十七歳のブラヴァント氏が話す言葉の調子が変わったところはなかったが、「私は長く生き過ぎた」と、秩父宮妃を始め、一人ひとりの面影を思い出すように名前を口ずさむ同

氏の表情に、どこか自嘲的な調子を感じられた。

今の陛下が皇太子のとき、ベントのピッケルを差し上げた、と同氏は話し、自分が日本とのつながりをどのように大切にしているかを説明してくれたが、ピッケルのことを、徳仁親王から直接私も伺ったことを話すと、同氏の表情には微かなほころびが見られた。

前に、今西壽雄元会長がブラヴァント氏を訪ねた時、一緒に撮った写真が会報に載り、そこに写っていた同氏の襟に名誉会員章がついていたことを思い出し、名誉会員章をつけた写真を一枚撮らせてもらった。

「スイス山岳会は私を名誉会員に推薦してくれなかったが、日本山岳会はそれをしてくれた」という同氏の言葉から、ブラヴァント氏に代表されるグリーンデルワルトのスイスが、日本にことのほか傾斜している状況が分かるような気がした。

そのときの今西さんも亡くなったと知った時の同氏の表情を想像すると、心が痛む。

南会津下郷のオオカミの剝製

佐藤芝明

福島国体の前後から十一月初旬に



三峰の催しに展示された「イヌ科動物の剝製」

かけて新聞やテレビで報道されて、関東地方を中心に全国的にオオカミの関心が高められたと感じている。

平成七年三月末、和歌山県大塔村の法師山の中腹で行われた「オオカミ誘い出し」に参加してから、十一月三日の三峰林道の誘い出しで、ニホンオオカミ・フォーラムには二回目の参加だ。

フォーラムの統括事務局長を勤めた上尾在住の八木博氏に参加を申し込むと、何かオオカミの情報はないか、という。八木氏は新潟県魚沼郡出身で、若い時に苗場山の小屋番をした時代にオオカミの吠え声を聞いたという。一昨年山岳会の「山」にのせていただいた記事「魚沼駒ヶ岳とオオカミ」のコピーを送ると、土地勘があるから、只見町入叶津の佐

藤泉氏の話や、日時・天候などを詳しく、と電話が夜半に飛び込んできた。佐藤泉氏の話は信頼できるからここから先は委せてくれ、と礼を尽くして申し込まれた。二つ返事で探索をお願いした。

八木氏は福島国体山岳ルート整備を自衛隊支援で行った泉氏から情報を得て役場から只見町名家の馬場先生へ、馬場先生の依頼で剝製作りをした南会津郡下郷中学の目黒先生へと情報をたどり、下郷中学で保管中の「オオカミ剝製」を発見した。

写真を見て、国体終了後ただちに八木氏に案内してもらい、下郷中学を訪問して、剝製の借り受けに立ち会った。感激の一瞬であった。三峰の催しには「イヌ科動物の剝製」として展示された。

この剝製について特筆すべきことは、捕獲者、捕獲地、日時、剝製作者、写真鑑定などがすべてはつきりとしていることだ。現地で、キツネ、タヌキ、テン、ムササビの剝製と比較できたこと、オオカミの毛皮を持っていた、浅草岳登山口の五味沢・音松旅館の浅井兄弟に見てもらったことや、鑑定に対する反論を聞いたことも収穫であった。

この捕獲について補足すると、捕獲日は昭和四十三年一月、罾に掛かり生存していたが撲殺した。入叶津

海外の山

てっぺんの料金

江本嘉伸

サガルマータ(エベレスト)はじ

めネパール・ヒマラヤの登山料と隊員数などがまた改定された。いずれさらに変更されるだろうが、ヒマラヤ登山史の貴重なデータともなると思われるので以下、料金表をあげておく。

一九九六年三月一日から実施される新規則によると、

△サウスコル経由のサガルマータ
 〓七万ドル(隊員数七人の場合、以下一人増えるたびに一万ドル追加)

△その他のルートによるサガルマータ
 〓五万ドル(同)

△それ以外の八〇〇〇メートル峰
 〓一万ドル(同、一人追加ごとに千五百ドル)

△七五〇一メートルから七九九九メートルまでの山
 〓四千ドル(同、一人追加ごとに五百ドル)

△七〇〇一メートルから七五〇〇メ

ートル峰
 〓三千ドル(同、一人追加ごとに四百ドル)

△六五〇一メートルから七〇〇〇メートル峰
 〓二千ドル(同、一人追加ごとに三百ドル)

△六五〇一メートル以下の山

〓千五百ドル(同、一人追加ごとに二百ドル)となっている。

一つの隊としては最大十二人までが認められ、隊長以外のメンバー変更は自由。また、同じシーズンに同一ルートで複数の隊に許可を出せるようになった。

さらに、登山料支払い後のルート変更も認められ、その場合サガルマータなら「一万ドルを追加」その他の山なら「登山料の二五パーセント」を支払うことが義務づけられる。

登山料を値上げしただけでなく、入山パーティー数、隊員数、ルート選択など山岳環境を考えての一時の制限をかなり緩和し、間口を広げた形だ。ヒマラヤ登山の潮流、とりわけ「隊長以外のメンバー変更は自由」としたとあり「国際公募隊」の増加をにらんだ決定という感じがする。

八〇〇〇メートル峰に一度立ちたい、との山好きの男女の「夢」は今年「現実」のものに変わりつつある。時間と金、そして健康な体力を持ち、

一定レベルのトレーニングさえ可能ならば決してヒマラヤのジャイアントは手に届かない存在ではない。

それを身近にしているのが「公募隊」というシステムだ。「隊長」として高峰の登山許可を取得したプロの登山家が隊員を募り、優秀なシェパールの力を借りてキャンプを建設し、「客」である隊員たちが頂上に立つのを支援する。

登山料がこのような上がつてくれれば隊員たちの負担も増大するが、「一生の夢を実現するのだから、金は多少高くても」という人が意外に多い。「登頂請け負い会社」もある。サガルマータの通常ルートでの登頂を「六百五十万円」と設定した。

かくしてベ이스キャンプには、今や「古典派」とでも呼ぶべき各国のオーソドックスな登山隊のほかに、アルパイン・スタイルをめざす少数精鋭のクライマーたち、そして公募登山隊の面々が仲良く同居することになる。これは二十世紀がヒマラヤにもたらした一つの成果と言えるだろう。

ただし、どのスタイルであっても、高峰登山の危険と困難に変わりはない。ここでの「客」は「金をしっかり払った上、リスク負担は個々人が負う」覚悟が必要だろう。

の里から一キロの山中で捕獲。入叶津は一月は雪が六メートルにもなる、只見町から七キロの僻地で戸数十戸である。

紅葉燃える下郷で剝製を車の後部座席に積んで校庭を離れたときに、一瞬であるがオオカミが動いたような気がして、その後も何度も振り返って見た。浦佐近くの夜道で八木さんは言った。「お前も埼玉まで行くなんて思ってもみなかったらう」。横顔に大粒の涙が光っていた。フォラム中はオオカミの見張り役をしていた。

只見に行く前に、日本山岳会の戸谷邦彦氏から一昨年の記事を想起されて参加の申し込みをいただき、大変心強いものを感じた。オオカミ情報や秩父山塊夜話に接してオオカミ生存への確信を強くした。来年は銀山平の山中にこもって、吠え声を確認してみたいと考えている。

白山の黒百合に埋もれて

小出和子

白山の頂上直下で高山植物を腹這いになって撮影中、脳溢血で最後をとげる吉松先生のシーンが直木賞作家の高橋治著『名もなき道を』の冒頭に記述されている。吉松先生は主

人公「楨山」の旧制第四高等学校の恩師として登場しているが、モデルは同校の名物教授として学生に慕われていた慶松光雄氏という。先生が白山で亡くなられたのは昭和五十一年七月三日のことであった。

私が蔵主にあるコーボルトヒュッテに行ったとき、先生は一月くらいヒュッテに泊りながら高山植物を撮影し、そこでの生活をヒュッテンブーフに綴っておられるのを読ませてもらったことがある。その後、先生は『花と実―随想写真集』にまとめて出版されている。その本を偶然、本屋で見つけて感激したことがある。そんなことで、白山の高山植物を訪ねるのは、ことのほか楽しみであった。

八月十九日、北九州を夜八時に車で出て永平寺に立ち寄り、白山の麓、白山温泉に着いたのはお昼時であった。それから登りはじめ、南竜ヶ馬場に着く頃、まわりの草原一面を夕日が照らしはじめた。ハクサンフクロウ、ハクサントリカブト、ニッコウキスゲの群落が次から次へと目に飛び込んでくる。八月十九日、夏も終りなのである。思いがけない花との出会いに、私たちはシャッターを切ったり、スケッチをしたりと、それぞれの想いで夕暮れのひとときを堪能していた。我に返って、急い

次代に残そう美しい山と溪

でキャンプ場に行きテントを設営した。

翌朝も素晴らしい晴天に恵まれる。隣の人とはもうテントを撤収し、携帯ラジオに合わせて体操までしている。年齢は私たちと同世代のようである。持ち物は十キロにも満たないような小さなリュック一つである。しかも単独行、これには驚いた。

「そんな小さな荷物によくまとまりましたねえ」と声をかけた。「さんざん、工夫した結果ですよ。最近の山の装備は軽くてコンパクトにできていますから」。私たちも見習って、これからは装備を軽量化する目安ができたと思ふ。

前日は暗くてわからなかったが、クロユリをはじめ、ハクサンコザクラ、イワツメクサ、アオノツガザクラ、シナノキンバイ、チングルマなどの高山植物が一面に咲き誇っている。慶松先生は、このように咲いているクロユリに足を止めて、シャッターを切ったのではないだろうか。

この語りかけてくるようなクロユリに何を語りかけたのだらう。私はクロユリをスケッチしながら、クロユリに埋もれて永遠の眠りについた先

生を思った。

南竜山荘からの登りには、ニッコウキスゲの群落、よく見ると、クルマユリも咲いている。室堂までの登山道にはチングルマの花が白く咲き乱れ、また花を散らして淡紫褐色の長い花柱を風になびかせていた。窪みにはコバイケソウも咲いていた。スケッチしたり、写真を撮ったりして、室堂の小屋に着いたのは、もう昼時になっていた。昼食をとっていると、小屋への物資運搬のヘリコプターが現れ、旋回するたびに土ぼこりがたち、アツという間に土弁当に化してしまった。

山頂を極め、下山は観光新道にした。簡単に下れると思ったのが間違いのもと、行けども行けども尾根また尾根で、白山の山の深さを感じさせられた。それでも疲れをとってくれるのは一面に広がるお花畑である。マツムシソウやミヤマシャジン、カライトソウ、などの大群落が私たちを喜ばせてくれた。

下の別当出合の駐車場に着いた時には、足は棒のようになっていたけれど、白山の高山植物は期待どおりの味わい深いものであった。

山の切手⑤ 一相山之良

日本隊初登頂の山・II



カンチェンジュンガ
1971年12月28日ネパール発行。左の白く大きく描かれているのがヤルン・カン。右へ主峰、中央峰、南峰。インドからも発行されている。

ヤルン・カン(八五〇五メートル)

世界第三位の高峰カンチェンジュンガの西峰である。一九七三年五月十四日、京都大学学士山岳会によって初登頂された。登頂した二隊員は帰途風雪の闇夜にさまよい、松田隊員が折れたピッケルを残したまま行方不明になった。上田隊員の「残照のヤルン・カン」は、その時の感動の記録だ。

マルビティン中央峰(七二六〇メートル)

一九七五年八月二日、日本山岳会岩手支部隊が初登頂した。南東にあるライラも、同年碧稜山岳会隊によって初登頂されており、南にあるハラモシユ、北東のスペインテイクは

ともに第二登に成功するなど、この山域における日本隊の活躍が目立つ。パビール(七〇五二メートル)

ガネッシュ・ヒマールIV峰で、一九七八年十月二十二日、日本勤労者山岳連盟・ネパール合同隊が初登頂した。ガネッシュは、五四四年の第二次マナスル隊がサマの住民に登山を阻止され、やむなくガネッシュに転進したいきさつがあり、日本とは縁が深い。II峰もV峰も日本隊によって初登頂されている。

ランタン・リルン(七三三四メートル)

一九七八年十月二十四日、大阪市立大学第三次隊とトリブバン大学合同隊が初登頂した。付近にある六七五〇メートルの無名峰は、六四年第二次隊が初登頂、第一次隊で亡くなった森本隊長を偲んでモリモト・ピークと命名。

ボゴダ(五四四五メートル)

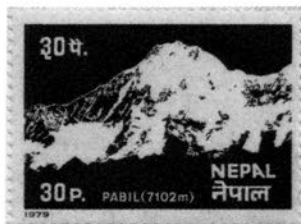
一九〇八年第二次大谷探検隊が山のスケッチを残し、一二年同第三次隊の吉川小一郎が登頂を試みるなど、日本にとって因縁浅からぬ山域だった。一九八一年六月九日、京都山岳会によって初登頂された。西峰は天山登山隊、第二高峰は日本山岳会学生部第二次隊がそれぞれ初登頂を果たした。



ボゴダ 1991年9月20日中国発行。ウルムチ郊外の石油基地から仰ぐボゴダ。左から主峰、中央峰、西峰。



ランタン・リルン 1981年12月30日ネパール発行。ランタン・リルン南面。



パビール 1979年9月26日ネパール発行。ガナッシュ・ヒマールを描く切手が、もう一枚ネパールから発行されている。高度は1983年ネパール政府によって改定された。ランタン・リルンも同様。



マルビティン 1981年8月20日パキスタン発行。中央の一段高いのが主峰(西峰)、右が中央峰。

私たちは次の目的地、五箇山に向かった。

ウエストンとアルプスの冒険談

田畑真一

明治三十七年五月十三日、ウエストンは横浜の教会堂で、アルプスでの冒険談について講演をしていたことが判明した。

この点については島田巽先人をはじめ、川村宏、三井嘉雄、安江安宣の諸氏がまとめられた労作(『W・ウエストン年譜その2』『山岳』第八三年)にも記事がない。だから、発表させていただく意義があると思う。明治三十七年五月十四日付『横浜貿易新聞』(所蔵・神奈川県立図書館)には次のように見えている。

「◎外人の新聞雑誌講読会 当地在留外人の組織に係わる新聞雑誌講読協会にては昨日午後八時三十分より山下町八十二番教会堂に於いて会合を催し、ウエストン氏のアルプス山に於ける冒険談演述ありたりと」

これによれば、同年五月十三日、講演会があったことになる。

「別記」『横浜貿易新聞』の記事にある振り仮名を省き、新字体・新仮名遣いに書き改めた。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

北海道支部

北海道ブロック

創立九十周年記念式典・山行

■記念式典

北海道ブロック記念式典は平成七年十一月十一日、札幌市・共済ビルの場合に村木会長、大屋常務理事、重廣常任評議員の三氏を迎え、一般の人々も多数交えて開催されました。日本山岳会の歴史Ⅱ今回のマカルーに至るまでの映像に見る当時の第一線級の人たちの懐かしい名前は、昭和二十年代から三十年代に山登りをした人々にとって、新たな感銘を与えられるものでした。会長の挨拶の中に会員の高齢化が進んでいるとありましたが、地方の山岳会も同じで、今後の課題でありましょう。

記念講演を終えて、会員と入会予定者約六十名ほどが集まって、山の話や、本部の人との情報交換など、楽しいひとときを過ごし、あとはそれぞれ二次会へと流れていきました。

■記念山行・樽前山

北海道の十一月はスキーには少し早く、ツボ足では腿まで埋まる雪、と登山にも不向きな時期で、記念山行は予定していませんでした。ところが早い初雪の後、あまり雪が降らなかったのも、急遽、山行を計画、樽前山・苔の洞門コースを登ることにしました。

十二日九時、バスをチャーターして、二十五名が昨夜の疲れも見せずに出発。十時三十分、登山口から登り始めました。このコースは幅一、二メートルの溶岩流の涸れた沢で、両側の岩壁には五、八メートルの高さで苔がびっちり張りついていて、一キロにわたり見事な箱状を呈しています。十六時二十分、好天ではあるが、物凄い強風について登頂。早々と下山にかかりました。途中、岩に足を取られて足首を骨折した人が出ましたが、中高年の経験豊かな元氣者が交互に担いで、無事明るいうちに下山することができました。

◆平成七年山行報告

五月 芦別岳 ユーフレ本谷 三キロ
の大雪渓を登る。

七月 大千軒岳と砂原岳 隠れキリシタン百数名処刑の碑がある。
またお花畑が美しい。

十月 武華山 観月並びに雪中山行。
(大久保五郎)

岐阜支部

井出小路山・秋季懇親山行

平成七年十月二十八、二十九日、四十七人の大所帯で裏木曾県立公園の井出小路山(一八四〇メートル)で秋季懇親山行を行った。

二十八日十七時に、ふりそぐほど星空の美しい、ランプの一軒宿、加子母村の渡合温泉へ集合した。

十八時からミーティング、リーダーの高木崎男支部長から「明日登ろうとする井出小路山は、奥深い藪山である。登山口(車止め)から林道を六キロメートル歩き、林道の上部分からカラ谷へとりつき、谷を三時間あまりかけて登る。途中から藪となり、日没など時間的都合によっては頂上へ登れないかもしれない。その時はリーダーの指示にしたがってほしい」と、登山の概要と厳しさを意図した挨拶があった。

いつもなら、歌の出るほどに夜遅くまで飲み、四方山話で懇親するのが常だが、厳しい山行を明日に控えて、皆早々に床に就いた。



雨支度でカラ谷を登る会員たち

二十九日七時に登山口に到着、当日参加の会員と合流、井出小路山林道を登り始める。空はどんよりと曇っていた。昨日まで日本全土を覆っていた高気圧が東へ去り、今日は前線を伴う気圧の谷が日本を通過するため、曇りいち時雨の予報である。林道の両サイドの樹高三〇メートル前後の木曾ヒノキは見事なものである。歩くこと二時間、九時に林道からの登り口、標高二八〇メートル地点に着いた。この頃からポツリポツリと雨が降り出した。雨具で身支度をし、カラ谷へと入る。大きな岩がゴロゴロして、しかも急勾配である。岩や流木が雨に濡れて滑りや

山と医療

山でタバコを吸うと…

堀井昌子

「禁煙したんじゃないの?」
「平山雄さんが亡くなったから、
また吸ってる」

中年男性二人の会話です。タバコの害を説き続けた平山先生が亡くなったからといって、喫煙による害が減るわけではないのですが、これがタバコ喫みの心情かもしれません。

お酒には功罪がありますが、タバコは医学的には害あるのみで、一利があるとすれば、静かに立ち昇る紫煙に心の安らぎを得るといった精神衛生的なものでしょう。

喫煙により体内に入った一酸化炭素(CO)の害は、登山の場合

とくに重要です。呼吸によって取り込まれた酸素は、ヘモグロビン(Hb)と結合して体の組織に運ばれますが、COは酸素の約250倍もHbと結合しやすいため、喫煙によってCOはいち早くHbと結びついてカルボキシヘモグロビン(CO-Hb)となり、組織に運ばれるべき酸素が減ってしまうこととなります。米国の調査によると、CO-Hb濃度は非喫煙者で平均1.3%、喫煙者で6.0%で、実験的には8分間の喫煙でCO-Hbは13%にもなるといわれています。

高所の低酸素状態でタバコを吸うことは、低酸素を助長することであり、これに対して心臓は心拍数を増やして改善しようとするので、負担が高まるというわけです。また、せっかく高度に順応して血液が増えても、喫煙によってそれが有効に利用されなくなるという、もったいないことが起こっているのです。

すく、皆難儀しながら登った。標高一六〇〇メートルあたりから谷は消え、高さ二メートル余りの根曲り竹の藪となり、勾配も六〇度とさらに増してきた。先頭を登る者がルートを確認しながら赤い布の目印をつけ、後から登る者はその目印をたどって登るのだが、それでも前の者を見失ってしまい、大声で「ヤッホー、ヤッホー」と声をかけあつて登った。

十一時に一七五〇メートルの尾根

の鞍部に登り着いた。天気さえよければ木曾駒ヶ岳など中央アルプスを見ることができたのだが、雲に覆われ、眺望できなかった。鞍部から尾根を北ヘルートを取り、さらに藪こぎすること三十分、十一時三十分に一八四〇メートルの頂上に立った。頂上は、コメツガ、トウヒ、シラビソ、ネズコなど高木が茂っていた。全員そろったところで、リーダーの音頭で万歳を三唱し、急いで昼食、十二時十五分、下山にかかる。途中、

先ほど登り着いた尾根の鞍部から南へ十分の二等三角点(一八〇六メートル)を確認して下山した。十六時三十分、全員無事登山口へ下り、散会した。
(清水芳彦)

青森支部

根深誠さんが本年度のJTB紀行文学大賞受賞

日本山岳会会員の根深誠さん(弘前市桜ヶ丘一九一―二)の著作『遙かなるチベット―河口慧海の足跡を追って』(九四年・山と溪谷社刊)が、本年度のJTB紀行文学大賞を受賞した。

慧海(一八六六―一九四五)は、仏教の原点を求めて一九〇〇年、厳重な鎖国政策を敷いていたチベットに単身潜入した探検家として知られる。しかしこの潜入ルートを明らかにせず他界。潜入口となったネパール西北のムスタン地方は、長い間鎖国していたため、潜入ルートは世界探検史の中で謎の一つとされてきた。ムスタンが鎖国を解いたのを契機に根深さんは九二年夏から、一時帰国を挟み二年がかりで、慧海の足跡が残るムスタン、トルボ地方を訪問。古老らの話と慧海の著作『チベット旅行記』の数少ない手掛かりを丹念に照合し、慧海が越えた国境の峠は



祝う会で花束を贈られる根深さん

マリユン・ラ峠であることを突き止めた、ついに念願の地を踏んだ。このいきさつをまとめたのが『遙かなるチベット』。慧海の足跡をたどり、厳しくも美しい自然と素朴な人々との触れ合いをつづった。授賞式は昨年十一月八日、東京の帝国ホテルで行われ、松橋功JTB社長が賞状と賞金百万円を贈り称えた。選考委員の西江雅之氏は「作者とその土地との対決の記録であり、一気に読ませた」と高く評価した。

また、根深さんの友人らが約百五十人集まり、十一月十二日、弘前市のホテルニューキャッスルで「受賞を祝う会」を開いた。根深さんはこれからも辺境の人たちの生活取材をしていきたい。また、六千メートル級の未踏峰を数多く登りたい。そして、ヒマラヤ・ネパールもののシリーズを書き上げたい」と決意も新たに述べた。

(村上義千代)

図書紹介



カット 中村あや

中島正晃(発信)
土田玉江(構成・文)
『グリーンデルワルト便り』

若きサイコウこと中島正晃は、風来の旅でグリーンデルワルトに立ち寄り、その美しさに感激するとともに、村のアルプス娘を愛してしまう。そして二十数年、結婚・子育てなどの苦難を超えて、今は義父のホテル・ベラリーを妻とともに継ぐ。息子がスイス軍に入隊する年齢に成長、サイコウにとっては半生の心の余裕を生み出した時期である。そこで自分を取り巻くアルプスの村を日本人向けとして紹介。男のロマンをすべて手中にし、今我々に贈った書としてまことにうらやましい限りである。しかしご本人の夢には限りがない。自らの製作によるヨットで大西洋を航海中とのこと。次回はぜひその報告を聞きたい。

(林 栄二)
一九九五年九月 山と溪谷社発行

図書紹介欄の 原稿について

- * 会で購入あるいは、寄贈されたルームにある本を紹介する。
 - * 毎月の図書委員会の折に会報の「図書紹介」委員会で検討し、紹介する本を決める。
 - * 紹介依頼者を決め、原稿依頼をする。(著者からの依頼で書いてくる方、ご自分でよいと思った本の紹介を書かれてくる方などがあると、委員会で依頼した方との原稿が重複することがあり、原稿をお願いした方に失礼にあたるので、会報「図書紹介」担当の細井が調整させていただいています)。
 - * 紹介スペースに限りがあり、原稿の長さを指定させていただきます。
- 以上のような手順で紹介させていただきますので、よろしくをお願いします。なお、紹介されなかった寄贈本については、受入報告という形をとらせていただいております。

(図書委員会・細井澄子)

二〇三ページ 千七百円

飯山達雄・編

写真集『北朝鮮の山』

韓国(朝鮮半島)の山でアルピニズムの対象となる山のほとんどは三八度線以北にある。それは雪岳山、金剛山、冠帽連山、摩天嶺山脈と白頭山である。本書はその記録である。

編者は一九一〇年半島に移住。二

六年六月北漢山の道峰山の岩壁を初登。ロッククライミングを独学。同年八月仁寿峰の東面ルート初登(クイバウイDカポッキル)。以後、金剛山に業務出張して、高距一〇〇〇メートルの岩峰を発見。東大の集仙峰のルート初登に前後して、ルートを開拓。三一年朝鮮山岳会を創立し、中心メンバーとして活躍。白頭山、冠帽連山の夏冬と登山、三四年の京大白頭山遠征、三六年の早大冠

帽峰遠征に同行。四三年『朝鮮の山』を発刊。

本書は続刊として集大成を目指したが、九三年他界。ために、山域の概念図がないのが残念。元熊本支部長奥野正亥氏が寄稿している。今回、遺族の努力で発刊にこぎつけた。第七章の「山は友を忘れない」に感銘した。

(石田稔郎)

一九九五年七月 図書刊行会発行
一七四ページ 五千八百円

山村調査グループ・編

『村の記憶』

登山の行き帰りや、峠の踏査などで山奥の村を訪ねる中で、そのたびごとに無人化してゆく村々を目にしていた。水を飲むものは、井戸を掘った人の恩を忘れないという。川下の町がにぎわうだけに、消えゆく川上の村にも思いをいたしたい。今な

らそこに住んでいた人が町で暮らしているし、当時の村の面影を写した写真も見つかるかもしれない。

こんな思いの県内の山登りをする二十数人が、手分けして県内の廃村を調査した結果を一冊にまとめた。

富山県過疎化対策協議会から発行された資料から、県内七十四の廃村を河川の流域別に分け、村の位置、歴史、住民の生活環境、廃村に至る経過と時期を、元の住民の協力を得て記述している。また当時の風景や生活状況、現在の状況の写真なども多く掲載し、当時の村の様子をのぶことができる。廃村になれば、国土地理院の地形図から村名が消えてゆくが、村名の入った古い地図を探し出して掲載している。

山男の足と、元住民の協力でまとめられた、努力が感じられる貴重な資料集となった。

(茂見 猛)

一九九五年三月 桂書房発行
三一ページ 二千四百七十二円

熊谷権・著

『グリーンランドは 旅人を離さない』

著者の七冊目となる山旅の画文集。本文は二度のグリーンランド行きとバタゴニア紀行、キリマンジャロ登山の四つに分れていて、二番目に

登場するグリーンランドの旅が本書の題名となっている。

全文を辛口の特徴ある権さん口調で貫いていて、一気に読ませる。あとがきに著者は次のように記している。「スタンダールの碑文にちなんで『生きた、描いた、恋した』と墓石に刻まれるように生きたい」と……。

この画文集を出すためにはそうとうの苦勞があったようだが、自費出版でも続けたいという著者の意気込みは、行間からも、スケッチからも感じ取れる。

一九九三年六月 白山書房発行
二二二ページ 二千円

群馬県山岳連盟・編

『母なる大空』

冬期サガルマータ南西壁
一九九一〜九二／一九九三〜九四

九三年十二月、世界初、冬期サガルマータ南西壁が登られた。群馬県山岳連盟が冬のヒマラヤを目指し、究極の冬期サガルマータに至るまでの経緯、烈風に阻まれた第一次南西壁の反省の上に組み立てられた第二次遠征計画、そしてその登攀の様子は、一ピッチ、一ピッチ、自分が登っているかのような緊迫感で引き込まれてしまう。

装備、食料、輸送、気象等々の記

述は、遠征を計画する人たちの参考になるだろう。また隊員それぞれの記は、山の様子、登山の様子を個性豊かに知らせてくれる。最強の登山隊が、最強のタクティクスで挑んだ南西壁の報告書である。(渡邊玉枝)

一九九五年八月 群馬県山岳連盟
発行 三八四ページ

宇都木慎一・編

『関大山岳部の七十年』

創部七十周年記念誌

一九二五年(大正十四年)当時の樺太や九州島遠征、八方尾根のウサギの肉入りカレーライスなどの古きよき時代にはじまり、アンデスやマナスルIV峰遠征などを編年史的に回想・報告している。中でも昭和初期に集中的に積雪期の後立山側から黒部横断を試みており、成果をあげているのは注目に値する。

巻末に現役部員のエッセイを載せている。若い人たちの自由闊達で元氣あふれる姿勢が好ましい。こういう活きのよい部員がいる限り、関大山岳部の伝統は受け継がれ、新しい発展をしていくことは間違いないだろう。

(松沢節夫)

一九九五年九月 関西大学体育会
山岳部・関西大学山岳部OB会
発行 三四三ページ 非売品

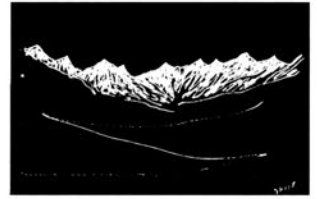
書籍受入報告(1995年12月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
愛知学院人学山岳会(編)	エベレスト・サウスピラー	200pp/19cm	成文堂	1995	発行者寄贈
深野稔生 他	山スキールート図集(改訂)第1集	203pp/19cm	白山書房	1994	購入
宮沢醇 他	山スキールート図集(改訂)第2集	220pp/19cm	白山書房	1994	購入
辻村太郎	地形學	610pp/23cm	古今書院	1929	久野行雄氏寄贈
辻村太郎	日本地形誌	455pp/23cm	古今書院	1930	久野行雄氏寄贈
木崎甲子郎	ヒマラヤはどこから来たか:貝と岩が語る造山運動(中公新書1190)	173pp/18cm	中央公論社	1994	山本健一郎氏寄贈
隅田正三	チベット探検の先駆者・求道の師「能海寛」	221pp/27cm	波佐文化協会	1989	山本健一郎氏寄贈
菰野山岳会(編)	SHUKRIA:菰野山岳会シスパーレ峰登山隊1994報告書	88pp/26cm	菰野山岳会	1995	発行者寄贈
立松和平	神様のくれた魚:ヤポネシア抒情紀行	269pp/20cm	山と溪谷社	1995	出版社寄贈
下平廣恵	日本アルプス:上高地を中心として	112pp/19cm	北信書房	1946	久野行雄氏寄贈
細川呉港	満ちてくる湖:The Flowing Lake	328pp/20cm	平河出版社	1995	出版社寄贈
小荒井実	山楽百花:自然のフォーカス	206pp/22cm	歴史春秋出版	1995	著者寄贈

*1月号掲載の11月受入書籍のうち大関保(著)は「ネパールヒマラヤの山旅」の誤りでした。お詫びして訂正します。

山研だより

山研運営委員会
溝口洋三



イラスト・宇津木慎一

日本山岳会の山岳研究所が建つ中部山岳国立公園上高地は、日本でも最高の景勝地の一つです。景色そのものが特別天然記念物に指定されており、広大な北アルプスの中でも山研の建設地から槍ヶ岳周辺までの一部の地域は、とくに厳しい特別鳥獣保護地区に指定されています。つまり、自然に対して特別の配慮をすべき地域に、山研は許可を得て建設されているのです。

そこで山研を利用する私たち会員の一人ひとりが、自然を汚さず、動植物を傷つけないようにするとともに、同行ビジターにも啓蒙と指導をお願いします。

さて、上高地山岳研究所は建て替えてから三年を経過して、年ごとに使い勝手がスムーズになってきました。平成七年度からは管理人に内田二葉さんを迎えました。内田さんは着任一年目で苦労も多かったのですが、大変な努力をされ、その結果施設内

外の掃除も行き届き、訪れる人々から快適との声が寄せられています。

本年度の利用者数は八百四十八人（会員三百八十五人、非会員四百四十五人、子供十八人）でした。利用の仕方は様々で、登山基地、各委員会の講習会やミーティング、支部グループや同好会の活動の場、自然学の実践教室、そして個人グループの余暇施設と、多彩に使われています。

また地下の山岳資料展示室にも、入場者が一段と増加しています。近代登山の歴史や、日本山岳会の活動の一端を一般登山者や観光客に知らせるといふ、博物館的な役割も軌道に乗ってきました。

一方、宿泊のキャンセルが大変多く、とくに希望者が集中する土日や連休は、泣く泣く宿泊をお断りしたのに、当日になるとグループの人数が激減、ということが何度かありました。グループ泊の幹事さんは早めにも正確な人数を管理人に伝え、少しでも多くの人が利用できるようにご協力ください。なお、山研運営委員会では平成八年度より予約のルール化を予定しています。

山研管理人からお願い

この一年、山研の管理人を勤めた経験から、内田さんに気づいたこと、

感じたことを率直に述べてもらいました。利用する会員は山研が日本山岳会全員のものであり、営業の宿泊所とは異なる施設であることを再確認していただきたいと思います。

①宿泊者は必ず予約電話を。とくにシーズン中の休日や曜日をしっかりと確認してスケジュールを組み、管理人に連絡してください。

②山研は旅館やホテルとは違います。（「お茶！」と怒鳴る人、セルフサービスですと答えると「女の管理人がいるのに」と色めき立つ人、縦走中の山小屋から電話で「雨でぬれたから到着時刻に風呂を沸かしておいて。お金はいくらでも出す」という人など）会員紹介者が利用する場合にこうしたケースが多いので、紹介者には山研の利用法をしっかり伝えておくべきです。できるだけ会員同伴でお願いします。

③集合場所にする場合の連絡は詳細に。（団体利用の場合、全国から山研入りするが、宿泊予定日の何日も前に、早朝突然たたき起こされ、名前もわからずに困惑することがたびたびあった）幹事は参加者全員の住所氏名、スケジュールを確認し、連絡してください。

④ゴミは各自持ち帰りを。（生ゴミの処理のみ山研で引き受けている

味の技、心でつくる



むさし坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし坊 麹町店
(有楽町線麹町駅東口)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友膳ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

が、百円払うのだからとドリンク剤の瓶や空き缶までリュックから出す人、「ストーブで燃えるからいいよね」と何個もの段ボール箱をおいていく人など）紙類ばかり燃やすと煙突にタールがついて危険ですし、燃やすことにもクレームがきます。ゴミは必ず持ち帰ってください。

⑤洗濯物は裏の干場に。テラスに下着や靴下を干す人がいますが、裏の干場を利用してください。雨で濡れたものも同様です。

⑥シャワールの利用は時間内に。（時間外の利用者が多いので、有料にするなど方法を考えてはどうか）

会務報告

十二月理事会

日時 平成七年十二月十四日(木) 十八時三十分～二十時四十分

場所 日本山岳会会議室

出席者 村木会長、宮下、中村各副

会長 大屋、吉永、中川、大

谷、松浦、水野、南井、渡邊

溝口、宇田川、熊崎、大蔵各

理事、川崎、石橋各監事、小

倉、大倉、村井、大森、重廣

各常任評議員

委任 斎藤副会長、伊藤、堀井、山

本、田邊各理事、神崎常任評

議員

【審議事項】

(一) 写真展名義後援要請の件 大屋

岩橋崇至写真展「名水・黒部の流

れ」を平成八年一月二十五日(木)～二

月二十日(火)、黒部市国際文化センタ

ー・コラーレにおいて開催のため本

人より後援を要請された。承認

(二) シンポジウム名義後援要請の件

宇田川

「冬山遭難事故・雪崩シンポジウム」

を平成七年十二月十六日(土)午後十三

時～十七時、東京代々木オリンピッ

ク青少年総合センターで開催するに

あたり、主催の日本レスキュー協議
会より本会に対し名義後援を要請さ
れた。承認

(三) 植有恒元会長の遺品撮影・資料
閲覧等の件 大屋

偶数隔月発行「Teepee」誌八

年二月発売号の連載企画「ニッポン

の探検家」に植有恒元会長を紹介し

たいので、本会に対し遺品の撮影・

記録映画「マナスルに立つ」など資

料の閲覧、貸し出しの許可要請が(株)

集英社よりされた。承認

(四) 資料貸出期間延期依頼 大屋

九五年四月より借用中のエベレス

ト模型一点を「一九九五年ヒマラヤ

登山・日本の快挙」(一九九五年十

二月九日～九六年六月二日 入場無

料)東京都板橋区植村記念館にて開

催にあたり、引き続き展示したい由

植村記念財団より要請された。承認

(五) 委員会の委員追加の件 大屋

①山岳編集委員会・大関義明(一

二〇二二) ②山岳研究所運営委員

会・堂本暁子(五〇九六) 承認

(六) 海外登山に対する推薦状交付要

請の件 大屋

同人シルバートートル(JACC会

員中心の中高年齢層登山グループ)

による一九九七年カラコルム・ガッ

シャブルムII峰(八〇三三メートル)

登山計画について、本会より都岳連

に対して推薦状取得の要請が小西政

継隊長よりなされた。承認

(七) 九十周年記念事業収支経過の件

吉永

十二月十三日現在の中間報告(別

紙)だが合同募金・式典展示経費・

ブロック助成金などに未確定部分が

あり、正式報告まで時間の猶予がほ

しい。承認

各委員会担当理事は七年度事業報

告・予算書を作成の上、二月一日ま

でに提出し、二月理事会で審議でき

るようお願いしたい。なお、百年史委員

会・データバンク委員会の調査予算

は、軌道に乗るまでは資料委員会と

抱き合わせ措置で願いたい。承認

(八) 九十周年記念フォーラム海外登

山の部 村井

記念フォーラム「マナスル初登頂

からマカール・東稜まで」は十月十四

日で一応終わったが、百周年に向け、

同名で「映像による編年史」の企画

書を添え、各新聞社等の協力を求め

ながら、映像・編集作業を進めてい

く。承認

(九) 山岳傷害保険の件 中川

前回より継続で調査を続けてきた

各山岳団体の加盟内容(別紙)だが、

本会に対する東京海上火災の条件Ⅱ

加入手続きの簡便・事故の際の個人

処理・山行中、日常生活上すべてに

付保・更改手続きの簡便・会に対す

加入会員数は揃めないが進行したい。
なお、他社からの申し入れもあり、
並行して調査検討していく。承認

(十) 定款改正の件 大屋

五月総会決定の内容で文部省に対

し許可申請中だが、平成八年四月よ

り入会金・年会費などの値上げにと

もない該当部分の改正を行う。しか

し未認可のため一月発刊の会員名簿

には現在(改正以前)の定款の掲載

となる。承認

(十一) SSFフォア・オール・ネット

ワーク加入の件 大屋

従前より笹川スポーツ財団「SSF

スポーツエード」の基金から本会

も助成を受けてきたが、今回、財団

の方針としてネットワークが結成さ

れるので(年会費五千元)本会も将

来を見据えてこれに加入する。承認

(十二) TV番組「驚きもの木二十世

紀」への協力依頼の件 大屋

朝日放送「驚きもの木二十世紀

」もうひとつの植村直己物語」(テ

レビ朝日系ネット一月下旬放送予定)

制作にあたり、一九七〇年日本山岳

会エベレスト登山隊の映像(NHK

サービスセンター所蔵フィルム)を

賃借するが、番組最後のロールスー

パーで「協力・日本山岳会」と明記

するとして(株)えぶぶんの志社より協

力依頼があった。承認

(十三) 九十周年記念の山岳名著販売期

間延長の件 南井

日本山岳会九十周年記念の山岳名著復刻版の販売期間を平成八年三月末日まで延長したい旨発売元の大修館書店より申し出があった。承認

【報告事項】

●図書委員会 ①第二十四回山岳史懇談会は九六年二月二十三日(金)十八時三十分よりJAC集会所、テーマ・日大「桜門の山」を語る 講師・

崎田熙氏、松田雄一氏。②第二十七回山岳図書を語る夕べは三月一日(金)十八時三十分からJAC集会所、テーマ・「スイス山案内人の手紙より」講師・岡澤祐吉氏で開催の予定。

●科学委員会 十二月二日(土)、青山学院大学総合研究所ビルにおいてシンポジウム「最近の山岳通信の進歩」を開催。百余名の参加があり盛会だった。なお、当日の資料集に残部があり、実費頒布可能である。

●青年部 十一月十八日(土)、東京代々木全理連ビルにおいて宮下副会長出席のもとに、山岳部監督会議を開催、九州、関西、東北の各校より百余名の参加で実施した。

●海外連絡委員会 十一月二十九日(木)、委員会を開催。審議事項は①カナダ山岳会より二〇〇〇年にアルパータ初登頂(一九二五年横有恒氏による)七十五周年記念イベントをJACと合同で開催したい、との申

し出の件につき、カナダ側スタッフの益田氏より直接計画の説明を受け、今後の取組について打ち合わせを行った。②アジア山岳連盟へ日本から参加している連盟所属団体は日本山岳協会だが、JAC海外連絡委員会

としても現況だけは知っておいてほしい、とのことで第一回総会と本年十二月カトマンスで開催される第二回総会の資料により、日山協の立場で神崎忠男委員から説明を受けた。

●指導委員会 今年度の指導委員会主催の研修会の概要が決定した。(1)アイヌ・クライミング研修会②二月四日(土)～五日(日)・八ヶ岳ジョウゴ沢周辺 ②山岳スキー技術研修会①初中級者対象研修会②三月二十三日(土)～二十五日(月)、菅平・根子岳及び四阿山周辺 ②中上級者対象研修会②四月十三日(土)～十五日(月)、谷川岳周辺 ③上級者対象研修会②五月三日(金)～六日(月)、剣岳周辺。次回委員会において各研修会の具体的な内容を詰めていく予定である。

●山岳研究所運営委員会 本年度の山研利用状況は、宿泊者・八百四十八名、収入・二百八十七万五千七百八十一円。

●財務委員会 会費納入の延滞(未納金)は一年・六百三十五名、二年・百十一名、三年(除籍対象)六十名であり、十二月二十日付けで請

求書を発送する。

●総務委員会 ①十一月十六日(木)、総務担当理事(大屋、中川)と同好会事務担当者で打ち合わせ会議を開催した。好感度であり、年一回の実施を予定。②一月末日、会員名簿発

刊。③全国支部事務局担当者会議を二月二十四日(土)～二十五日(日)、水道橋グリーンホテル。④新入会員オリエンテーションを三月十六日(土)十三時三十分よりJAC会議室。⑤日本山岳会定期総会は五月十八日(土)、水道橋グリーンホテルで開催予定。

●集会委員会 ①一月十三日(土)～十五日(月)、磐梯吾妻高原スキー懇親会五十名参加予定。②四月十四日(土)、サクラハイク・九五年に入会した会員を中心に実施。③五月二十五日(土)～二十六日(日)、若葉会山行・二十年記念イベントとして新潟入広瀬村をベースに周辺の山に登る予定。

■会員異動

物故

国島陽三(七二七〇) 不詳

川崎堅太郎(一七九二) 6・6・23

小林兼一郎(九四五七) 6・11

余部守男(三三八三) 7・7・7

金山淳二(一六七二) 7・12・4

遠藤泰孝(九二二二) 7・12・28

退会

飯島治(一〇四五五) 7・12・31

創立90周年記念事業募金応募状況

(1月9日現在) 累計/1,561人/4,327口/21,634,603円

田崎明美(一〇四七七) 7・12・31
伊丹一男(八三一五) 7・12・31
終身会員
高橋聰(五八三二)
姓名変更
坂神昌志(二一九四五) ↓坂神昌始

●60口(300,000円)
藤平正夫(計190口)

●6口(30,000円)
紫蘭会(計8口)

●2口(10,000円)
屋敷具子 下山壽 中野
和郎 宮崎紘 阿部克雄
田辺正英

●1口(5,000円)
坂井久光 倉岡啓吉 木
名瀬亘

INFORMATION



◆遭難捜索費用担保付普通傷害保険

の団体導入について 総務委員会
現在、山岳事故及び遭難事故に対応できるいくつかの共済制度があります。しかし残念ながら、申し込みに際しての手続き及び個々の意識などの問題により、当会会員の加入率は低いのが現状です。現在では山行活動を行うにあたり、万が一の事故には、個人個人で準備をしておくことが常識となりつつあります。

◆講演会のお知らせ 医療委員会
日時 三月二十一日(木)十八時三十分

場所 日本山岳会ルーム

演題 「運動と活性酸素ー運動は活性酸素という毒を発生し、本当に体に悪いのかー」

講師 大野秀樹・防衛医科大学校衛生学教授

◆第五回山好きの山の絵展開催
アルパインスケッチクラブ

日時 二月二十五日(日)～三月二日(土)
十一時～十九時(初日は十三時より、最終日は十七時まで)

場所 東京交通会館2Fギャラリー
JR有楽町駅前(千代田区有楽町二一〇一)

◆第二十一回・中部博之山の絵展
日時 二月二十七日(火)～三月三日(日)
十一時～十九時(日曜日は十六時三十分まで)

会場 心斎橋フジギャラリー(大阪市心斎橋筋一四一四)

問合せ TEL〇六二二五二二四〇〇

◆爽やか山行・子ノ権現 緑爽会
子年に、子ノ権現に詣で、竹寺まで歩きます。日だまりでは梅の開花も見られるでしょう。

日時 三月二十四日(日)
コース 西武池袋ー西吾野ー子ノ権現ー豆口峠ー竹寺ー鐘は堂ー小殿ーバスー飯能ー池袋

集合 西武池袋駅七時五十五分発快

急寄居行車内前部・西吾野駅
九時十六分着

参加費 三百円(保険料)

申込 葉書またはFAXに氏名、会員番号、住所、電話番号を明記、三月十九日必着。〒一八九東

村山市萩山町五一六二〇ー三〇二 山口悠紀子宛

FAX〇四二二一三五一六五六三

ルーム日誌

12月

1日 青年部

4日 総務委員会

5日 アルパインスケッチクラブ

6日 青年部 山学研

7日 集委員会 学生部

8日 自然保護委員会 フォトビデオクラブ

9日 二火会 土曜会

11日 アルパインスキークラブ 94

12日 同期会 図書委員会

13日 フィルムビデオ委員会

14日 常務理事会 ジャック93会

15日 理事会 集委員会

16日 青年部 山学研

18日 フォトビデオクラブ

20日 資料委員会

21日 指導委員会 三水会

山学研

◆編集後記◆

会報の原稿についてお願い
①原稿は一行十六字詰めの縦書きで。
②「東西南北」欄などの原稿の長さは本誌の二・二・五段分(一段は五百十二字)を目安にしてください。
③発行日は毎月二十日ですが、その月の号に掲載になる原稿の締切りは前月の十日です。とくに開催日などのお知らせで、ご注意ください。
④原稿は事務局でなく、伊藤宛(二月号に記載)に送ってください。
FAX(〇四七一七四一一〇三)でも結構です。(伊藤 敏)

22日 科学委員会
25日 アルパインスキークラブ
26日 自然保護委員会

■訂正 十月号丹水会お知らせ及び十一月号同会報告の執筆者氏名「山本正基」が欠落していましたので、お詫びして訂正します。

日本山岳会会報 山 609号

1996年(平成8年)2月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 村木潤次郎

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 双陽社